蚕種、繭の流通ネットワーク

『愛甲郡制誌』には「……その当時（元禄年間か）は蚕種は奥州地方から多く移入され福島県の養蚕家・金井十郎次は依知地方に数代継続し、蚕種を販売し安政年間に及んだ記録がある」という記述があります。どうも、養蚕の世界では古い時代から「流通ネットワーク」が構築されていたようです。ここでは、それを具体的にみてみましょう。

『愛甲郡制誌』に記された「福島県の養蚕家・金井十郎次」の記録の他にも、「依知村梅沢忠左右衛門に関わる繭買帳によると文化年間に相当養蚕を経営せられ毎年五、六十貫宛の収繭があった……繭は多く田名村、相原村、八王子方面に販売され、製糸まではやらぬ……」というような記述がみられます。ここには、養蚕という生業が古くから一村では完結しない「養蚕のネットワーク」とでもいうべきものによって成り立ち、それが流入、流出の双方向にあったことがうかがわれるのです。

養蚕はひとつの村では完結しない

桑の品種としても「下依知早生」が江戸時代の文政年間における品種として確認されていますが、桑の新種というものも種子等、交配の成果であろうから、これもまたこうしたネットワークによるものと考えられます。

江戸時代には奥州本場種（信夫、伊達 47 ケ村）、結城本場蚕種（ニギ種）、信州本場蚕種といわれ、これらの地に産する蚕種は、冥加金を徴されることによって“本場”の名を独占していました。明治以降も、この本場種繭飼育の構想は、「飼育分場」種繭飼育の形で継承されたといいます。明治期の厚木には、蚕種屋（タネヤ）が存在しながらも、養蚕農家は「本場」といわれる産地から蚕種を購入し

ていました。

　このような問題については、厚木の蚕種屋の分布と販売範囲、また一般養蚕家が購入していたタネヤの範囲を、時系列をもクロスさせた上で考えてみる必要があるでしょう。また、田の畦畔→桑園といった桑園の移り変わりに伴う景観上の変化、家屋形態、経済状態等、新技術がムラに与えた影響全体も俯観してみなくてはなりません。

　この展示会ではそこに至るステップとして、養蚕に携わった一人の人間が、個人としてムラに与えた影響を、養蚕教師・小林升の紹介といった形でみていきます。